研究課題	若手教員の ICT 活用指導力向上のための「栗原版 StuDX Style」の構築と実践
副題	～若手教員をつなぎ，学び続ける教員集団をめざす，プラットフォームの活用を通して～
キーワード	StuDX Style，若手教員，ICT 活用指導力，プラットフォーム
学校/団体名	公立栗原市情報教育推進委員会　栗原 StuDX チーム
所在地	〒987-2252　宮城県栗原市築館薬師一丁目 6-1
ホームページ	https://www.kuriharacity.jp/s001/010/010/010/010/010/50166.html

１．研究の背景

〇本市では，新規採用教員の急激な増加により，経験年数の均衡が崩れている。経験年数 10 年未満の若手教員が約 40%，25 年以上のベテラン教員が約 42%である一方，若手教員の目標であり精神的な支柱となる 10～25 年未満の中堅教員が約 17%と不足しており，校内での OJT が十分機能できない状況となっている。特に小規模校においては，中堅教員不在の学校も少なくない。また，コロナ禍及び働き方改革の名のもと集合研修も極端に少なくなり，勤務校以外の教員の授業を参観したことが一度もない若手教員が多数存在する。このような中，教員同士の縦と横の繋がりが希薄となり，日々の悩み等を共有できず，孤立化が懸念されている。市をあげて若手教員の指導力の向上と心のケアを行い，学び続ける教員としての基礎を形成していく必要がある。

〇若手教員の中には，GIGA スクール構想による急激な ICT 環境の進展に追い付けず，コンテンツを見せる授業,教科書をなぞる授業となってしまう教員も少なからず存在する。そのような中，児童・生徒の学力低下が懸念されており，近年右肩下がりとなっている。また，市内教員の「ICT 活用指導力」については，ハード的な導入は全国とほぼ同様であるとともに，「令和 4 年度学校における教育の情報化の実態に関する調査結果」についても全国とほぼ同様の状況である。しかし，現実の授業の様子を見てみると，B（授業に ICT を活用して指導する能力）や C（児童生徒の ICT 活用を指導する能力）については若手教員の指導力に大きな差があるのが実態であり，市をあげて底上げを図る必要がある。各教科の学習における ICT を活用した個別最適な学びと協働的な学びを一体的に推進し，主体的・対話的で深い学びを指導する力が必要となっている。

２．研究の目的

(1) 若手教員の ICT 活用指導力向上を目指す「栗原版 StuDX チーム」の組織と運営

若手教員のメンター的存在としてのチームを組織し，教員の ICT 活用指導力の向上と児童・生徒の情報活用能力の向上に向けた取り組みを展開する。日々の授業に直結した実践的な研修を体系的に構築・実践することで，若手教員の授業力を培う。

(2) 若手教員をつなぐプラットフォームの構築・運用による学び続ける教員集団の形成

互いに顔の見える関係を築き，繋がり合い，支え合い，学び合い，切磋琢磨する場を構築する。

学級づくりや授業に役立つ情報を常に蓄積，発信するとともに，日々の実践のケア等の校内での OJT を補完することで，授業力の向上に寄与する。また，交流を通して相互の横と縦の繋がりが促進され，若手教員の孤立化を防ぎ，心のケアを図る。

３．研究の経過

4 月当初に，市内の授業力に優れた中堅教員を中心とする「栗原版 StuDX チーム」を発足するとともに，4 つのチームを組織し，活動をスタートさせた。本年度は実践初年度ということもあり，前半は現状把握と今後の対策を図り，後半に実践を積み重ねていった。その概要は以下の通りである。

（1）調査研究チーム

市内教職員（特に若手教員）の実態と困り感を調査するとともに，浮かび上がった課題をもとに今後の実践についての方向性を考えるチームである。

①「若手教員の困り感に関するアンケート調査」実施・考察

3 年以下の若手教員の日々の学校生活に関するアンケート調査を行った。「研究の背景」でも述べたとおり，各校には若手教員とベテラン教員が多く，中堅教員が極端に少ない状況となっている。そのような中，日々どのような困り感をもって生活しているかを調査することで，今後の若手教員への指導について考える材料とし校とするものである。

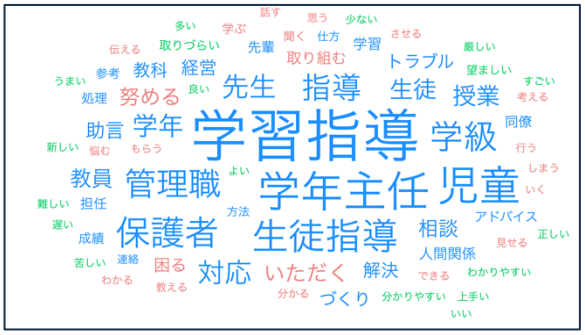

図 1：若手教員の困り感に関する調査のテキストマイニング

テキストマイニングの画像に現れているように，日々の授業についての内容，進め方等，具体的なことを知りたいと思っているが，何により情報を入手して良いか分からず，困っている初任層が多いことが分かった。本来学年主任や指導教員等からの指導や助言により学んでいくことであるが，本市の 2／3 にあたる単学級の学校においては，校内での OJT が上手く機能していない状況が見えてきた。このような考察から，次年度初任者及び若手教員への望ましい OJT の在り方や，メンタリングについて手立てを講じる必要がある。

②「AI ドリル活用アンケート調査」実施・考察

活用 2 年目となる AI ドリル活用についてのアンケート結果を行った。AI ドリルの授業での活用，宿題等での活用，活用に際しての教師の意識，児童の活用データの評価や個別指導，業務改善への意識等についての調査の結果，本来持っている機能を十分に生かしていないことが分かった。また，教師の意識の低さも露呈した。この結果をもとに，次年度は年度当初から，日々の授業の中で意図的に活用し，児童生徒個々の状況に応じた適切な指導を行うことや，児童生徒のデータを学習指導や評価への利用についての研修を行うことを決定したところである。

また，管理職及び研究主任等による AI ドリルの選定委員会も実施した。各メーカーのプレゼンを聞くことで，改めてその機能や効果的な活用方法等を知ることで，各学校内での実践の質が変化していくことを期待した。

(2)「ICT 活用栗原スタイル」構築・実践チーム

栗原市内の教職員の ICT 活用指導能力の向上とともに，児童・生徒の情報活用能力の向上を図ることを目的としたチームである。

①「栗原版情報活用能力育成表」の作成

市内教員の ICT 活用指導能力の向上と児童生徒の情報活用能力の向上をねらい，「情報活用能力育成表」を構築した。文部科学省が示している「体系表例」や各自治体が作成しているもの等を参考に，本市の教員及び児童生徒の実態に合ったものを作成した。次年度以降，この育成表を以下の観点で活用していく予定である。

○管理職は，自校の情報活用能力の育成状況を把握し改善を図るための指針として活用。

○研究主任・情報教育主任は，学校の実態に合わせて段階的に進めるための基準として活用。

○各担任は，各教科の学習の中での具体的な指導改善と充実を図る目安として活用。

図 2：栗原版情報活用能力育成表

②ICT 活用による働き方改革

ICT を活用した校務の効率化等を推進するために，本市で導入しているクラウド型教育プラットフォームアプリ「まなびポケット」を活用し，家庭との連絡をデジタル化する取組を行っている。今年度はテストケースとして小学 2 校が導入し，学校からの学校便りの配信，学級からの日々のお知らせの発信，保護者からの欠席等の連絡等を実践している。これにより，朝の電話連絡や，お便りの印刷業務，子供を通じた保護者への連絡等が軽減されている。また，栗原市立築館小学校他，数校が，GoogleSite により構築した校内教職員用のページや，GoogleChat を使った連絡を行っている。これにより，職員会議，定例打合せ等の廃止・縮小等を行い，学年による打合せの時間の確保や児童生徒と向き合う時間の確保に大きく寄与している。次年度，この取組を市内全校に広めていく予定である。

図 3：築館小学校職員ページ

(3)「栗原教員研修プラットフォーム」構築・実践チーム

栗原市内の教職員（特に若手教員）の授業力向上のためのプラットフォーム構築を目的としたチームである。

①プラットフォーム構築と活用

市内の教職員が，授業を行うに当たって参考となる Web ページや，参考資料等を収集し，提示するページを構築し，常時更新している。本委員だけでなく，中堅・ベテラン教員が授業するに

当たって日常的に行っているノウハウ等を収集・掲示し，若手教員がその情報を参考に，自ら学び続ける教員の基礎をつくれるようにと進めている。

②若手教員チャットルーム構築と活用

若手教員の困り感を調査した結果によると，先輩教員に日々の学習指導について教えて欲しいと考えている教員が多数を占めている。また，その他の学級経営，児童理解，生徒指導等の様々な悩みを主任や先輩教員に伝えたいと思いながらも，日々の多忙感により気軽に話せないという悩みを抱えており，メンタリングの大切さが浮き彫りになっている。そこで，若手教員同士の交流の場としてのチャットルームの開設を行い，現在テストケースとして一部の先生に利用してもらっている。生徒指導上の問題等については，個人情報等の問題により，ルームでの発言は避けてもらい，主に学習指導に特化したものにしている。次年度以降本格稼働を目指しているが，小学校であれば学年のルーム，中学校であれば教科のルームをつくり，日々交流するものにしていく予定である。各ルームにはメンターとして中堅教員を 2 名程度配置し，若手教員の個々の悩みに寄り添う体勢を取っていく予定である。

図 4：栗原市教員プラットフォーム

(4)「ICT 活用授業研究チーム」

市内教員（特に若手教員）の ICT 活用指導能力の向上と児童生徒の情報活用能力の向上を目指して，実践事例集の収集・活用促進と，オンラインによる手軽な研究授業を行うことを目的としたチームである。

①「ロイロノート実践事例集」収集・活用

市内教員の ICT 活用指導能力の向上と児童生徒の情報活用能力の向上を目指して，個々の教員が日常の授業で自作した教材を収集し，市内教員に自由に活用してもらえるような仕組みを作った。学年・教科・単元・活用の意図・活用の手順等を簡潔にまとめた表紙を付けて保存することで，特に若手教員が手軽に活用することができるようにした。ロイロノートの教員の資料箱に収集することで，市内教員であれば誰もが自由に活用できるようにしている。今後，さらに広がっていくことを期待している。

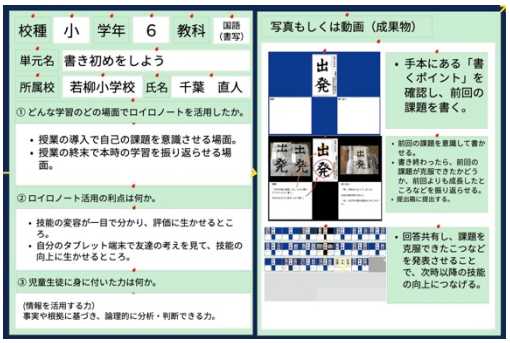

図 5：ロイロノート実践事例集

②360 度 Web カメラによるオンライン研修会及び授業公開実施

本助成により 360 度 Web カメラを購入した。このカメラを活用して，各校で行われている研修会や研究授業を，市内の先生方に手軽に見ていただけるような仕組みを作った。黒板や教材などを広く

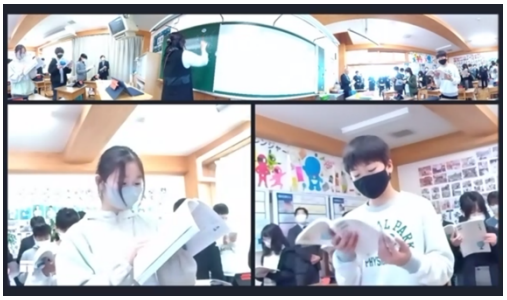

写真 1：360 度 Web カメラによる公開授業

見せる映像と，発言している児童の映像が同時に見えるため，臨場感ある映像を見ることができる。コロナ禍以前と比べて，働き方改革のいう言葉がクローズアップされ，生の研究授業等を参観することが少なくなってきた中，このような手軽な授業参観は，若手教員にとって大きな学びの機会と考える。

各校が講師を招聘して児童・生徒への示範授業を行う様子や，講話の様子，そして研究授業等を複数回実施した。

４．代表的な実践

【築館小学校研究授業公開及び研修会】

築館小学校の研究授業と講師による講話を，360 度 Web カメラにより市内小・中学校へ配信した実践である。これにより，教室での直接参観と配信による参観をすることができた。

写真２：６年算数授業風景

(1) 授業の概要　「自由進度学習」

①単元名

６年算数科「およその面積と体積」

②本時の目標

身の回りにあるものの形について，その概形をとらえることで容積や体積を求められることを理解する。

③形態　１時間内自由進度学習

(2) 児童の学びの姿

①導入（10 分）

ランドセルの形を基本図形の概形と捉えさせ，およその容積の求め方を確認した。

②展開（30 分）

・ロイロノートの共有機能を使い，誰がどの学習に取り組んでいるかを視覚的に提示した。それを見ながら児童は，分からない問題があった際に，同じ問題に取り組んでいる友達に教えてもらうなど，協働の仕方を自己決定していた。

・誰に教えてもらうか，誰と学びを支え合うかに関しては児童に任せている。しかし，仲の良い友達とばかり学習を進めることで学びの深まりが不十分にならないよう，「学習中には，普段の友達関係を持ち込まない」ことを児童と確認してきた。児童は多くの児童と関わり，学習の過程や成果を共有することができるようになってきた。

・本授業の展開時にも，教科書の練習問題を１人でじっくり取り組む児童やペアでスキルに取り組む児童，難易度の高い問題に対し，３人で役割分担をしながら学びを支え合う児童などの姿が見られた。

（3）研修会

宮城教育大学から指導者を招聘し，授業の参観とともに，自由進度学習についての講話をいただいた。授業の内容から学校の研究体制などについて，丁寧に指導いただき，次年度以降の取組の指標を得ることができた。

（4）教員の参観について

〇市内全校へ案内を出し，直接かオンラインによる参観かを選択できるようにした。授業や講話をオンライン配信し，学校事情により参加できない教員の研修の場として公開した。

〇若手教員は，学級を空けることに不安を持っており，空き時間にオンラインにより手軽に参加することができるこのような研修会は，今後ますます必要となってくると考える。

写真 3：授業配信を参観する若手教員

５．研究の成果

（1）実態の把握と今後の施策や研修の方向性を見いだすことができた

今年度は、研究初年度ということもあり，組織体制づくり，各種実態調査，研究実践の方向性に関する議論に多くの時間を使った。それにより，市内教職員の指導力の現状を把握することができ，今後の取組の方向性を明確にすることができたことは大きな成果である。特に若手教員の日頃の困り感を把握することができたことは，今後市をあげて若手教員の確実な育成を図ることの必要性を認識することができた。その上で，委員それぞれが各校の若手教員をみつめ，指導することができていることは，今後の成果に大きく寄与すると考える。また，AI ドリルの活用についての調査により，市内教員の活用頻度，意識等が明らかになり，教育データの利活用を求められているこれからの教員への研修の在り方の方向性が見えてきた。このような調査による市内教員（特に若手教員）の実態を把握できたことは，今後の施策の在り方や研修の在り方に大きく寄与すると考える。

写真 4：チームによるディスカッション

（2）教員（特に若手教員）の ICT 活用指導力の向上を目指すべく，様々な取組が動き始めた

各種調査による実態と今教師に求められている力を考え，具体的な活動を開始した。日頃の実践を収集し，手軽に活用できるような仕組みを作り，市内教員で共有している。今後実践例を充実することで，市内教員の ICT 活用指導力の向上が期待できる。

360 度 Web カメラを活用したオンラインによる公開授業を市内の教員限定で行った。この取組が充実することで，授業を参観する機会が増えることで，指導力の向上が期待される。今後，市内の各教科研究会等とコラボレーションした取組を模索していきたい。

AI ドリルの効果的な活用についての研修，児童のデータを活用した指導の個別化・個性化や評価についての研修等，これからの教員に必要な意識改革とスキルを身につける新たな研修を模索していきたい。

６．今後の課題・展望

(1)「栗原StuDX チーム」により，今年度の研究成果を継続・発展させ，若手教員のICT活用指導力を向上させると共に，持続可能な取組とする。

今年度の研究により取り組んだ①「教員研修プラットフォームの構築」，②「ロイロノートの実践事例，収集・蓄積・活用」，③「360 度カメラを活用した手軽な公開授業実施」，④「栗原版情報活用能力体系表の授業への位置づけと実践」を，継続・発展させることで，若手教員の指導力向上を図る。また，今年度の調査により課題となった，AI ドリルの授業への生かし方，個別指導への生かし方，評価への生かし方等について実践を積み重ね，その効果を共有することで，市内教員の個別最適な学習と協働的な学びを一体的に指導する力をつける。

(2) メンター不足解消と学び続ける教員集団を育成するオンラインによるOJT の実践

若手教員同士がネットワーク上で交流できる学年・教科毎のコミュニティを構築する。そこにメンターを配置し，日々の学習指導や学級作り等への指導・助言を行う。オンライン上でのメンターは，校内のメンターとも連携を取り，各メンティの状況に応じた指導・助言を行う。本研究を通して市全体で若手教員を育てるという意識，チームで若手教員を育てるという意識を醸成し，持続可能な取組とする。

７．おわりに

本助成を受けることができたことで，本市の現状と課題を把握すると共に，今後の方針を確立することができたことに感謝の気持ちでいっぱいである。今後，この取組を一過性のものにせず，持続可能な取組となるよう，本委員会の取組から，市全体の取組に発展できるよう進めていきたい。そしてそのことが，市内教員の ICT 活用指導力の向上とともに，児童生徒の情報活用能力及び学力の向上に繋がることを期待している。

1 年間，オンラインサポートにより，中村学園大学教授山本朋弘先生をはじめ，多くの先生方に指導をいただいたことで，ここまでの実践を行うことができたことに感謝を申し上げたい。

８．参考文献

○情報活用能力育成のためのアイデア集　文部科学省　令和 5 年
○教育の情報化に関する手引き（追補版）　文部科学省　令和 2 年
○みやぎ情報活用ノート（小学生・中学生）宮城県教育委員会・仙台市教育委員会　平成 31 年
○StuDX Style　文部科学省 Web ページ
○未来の教室を創ろう　LEARNING INNOVATION　経済産業省 WEB ページ
○学校 dx 戦略アドバイザー事業　ポータルサイト　文部科学省 WEB ページ